

# 正法寺跡発掘調査概要

— 四條畷市清滝所在 —

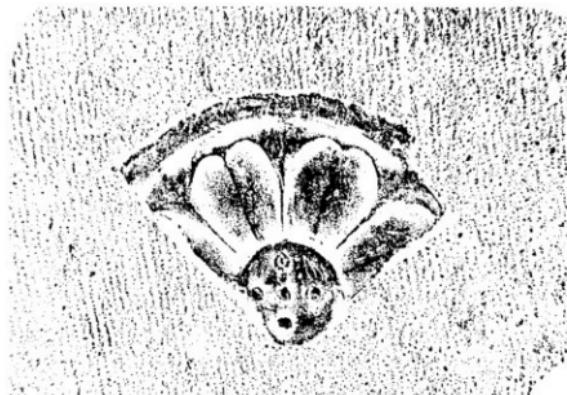


1997年3月

四條畷市教育委員会

# 正法寺跡発掘調査概要

— 四條畷市清滝所在 —



1997年3月

四條畷市教育委員会

## は　し　が　き

古代寺院正法寺跡は、遺跡が数多く存在する本市にとっても重要な場所の一つである。

この地に関しては、従来から何回も部分的に調査がなされているものまだ全容解明には至っていない。

本報告書も調査面積は小さいけれども、その一助になることは当然である。内容は本文に述べる通りであるが、この一つ一つの調査の積み重ねが大きな意義を持つものと信じている。

いつも思うことであるが、この旧正法寺跡に立てば、先人がこの地に寺院を建立しようとした気持ちがおのずと解る気がするのである。

その当時、小高いこの場所からは間近かに河内湖を眺め、足下には後背の山からの谷水が清らかに流れ、山の端を通る道が南北にはしり、東へは大和と結ぶ峠道が開けている。まさしく、寺院が存立する上で最適の立地条件であったであろう。

この地に存在した正法寺と号する大寺院に対し、人々はどのような感覚で接していたのであろうか非常に興味深いところである。

私たちは現在、文化財をできる限り保存し後世に伝えていく義務を担っている。しかし、地域の発展や開発という現代的要求とどのように両立させていくかについては、まだまだ工夫を重ねなければならないと思われる。

地域に残された大切な文化財を市民全体のものと考え、市の歴史や伝統の中に位置づけ、市民生活の中に育んでいければと願っている。

この正法寺遺跡など、まさしくこの願いに合致する重要な文化財であると信じたいのである。

本冊子も含め以前の調査と共に今後の全容解明にまで大きな期待を寄せていくたいと思っている。

最後に本調査のためにご協力を得た松原勤氏に対し、感謝の意を申し上げると共に、大阪府教育委員会のご助力に御礼を述べ謝意を表したい。

四條畷市教育委員会  
教育長木田喜重

## 例　　言

1. 本書は、四條畷市教育委員会が平成8年度国庫補助事業として計画、実施した四條畷市所在の正法寺跡他の発掘調査事業（総額1,100,000円、国庫50%、府費25%、市費25%）の概要報告書である。
2. 事業は四條畷市教育委員会の直営事業として実施し、大阪府教育委員会の助言を得て、平成8年12月12日に着手、平成9年3月31日に終了した。
3. 調査は四條畷市教育委員会歴史民俗資料館主任技師、野島 稔を担当者とし、調査事務等については、歴史民俗資料館職員の協力を得た。
4. 発掘調査の実施にあたっては、土地所有者の松原 勤氏のご協力を得た。厚く感謝の意を表したい。
5. 発掘調査の進行、本書の作成にあたっては、次の方々のご教示を得た。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）  
関西外国语大学 瀬川芳則・片岡 修、大阪府教育委員会 堀江門也・中井貞夫・広瀬雅信  
小林義孝・酒井泰子、財団法人枚方市文化財研究調査会 櫻井敬夫、枚方市教育委員会  
竹原伸仁、寝屋川市教育委員会 塩山則之、交野市教育委員会 真鍋成史、大東市歴史民俗  
資料館 黒田 淳・中達健一。
6. 出土遺物の整理、実測等については野島 稔、佐野喜美、駒田佳子、片山清香、橋本真紀  
があたった。
7. 本書の執筆は野島 稔が行なった。

## 本　文　目　次

### 例　　言

第1章 遺跡の位置と歴史的環境 .....	1
第2章 調査の成果 .....	2
第1節 基本層序 .....	2
第2節 遺構 .....	2
第3節 出土遺物 .....	4
第3章 ま　　と　　め .....	11

# 第1章 遺跡の位置と歴史的環境

正法寺は四條畷市大字清滝に所在し、生駒山系の西側斜面に派生する清滝丘陵にある。四條畷市を、南北に通じる東高野街道と東西に横切る清滝街道が交差する地点から、清滝街道を東に約100mのところにある。この標高30mのゆるやかな高台一角が正法寺の寺域である。地籍にも正法寺の名が残っている。

昭和6年に発行された、平尾兵吾氏著の『北河内郡史蹟史話』の中に正法寺のことが記されており、寺域も広く壯麗な大伽藍が整っていたであろうと紹介されている。寺跡は長い間水田地であったが、昭和44年及び平成5年に主要地方道枚方・富田林・泉佐野線バイパス建設工事に先立つ大阪府教育委員会の調査によって、正法寺の創建と歴史について明らかにされた。主な伽藍は高台の東西・南北ともに約100mの中におさまり、南から南大門・中門・東西の塔・金堂・講堂と並ぶ薬師寺式伽藍配置であろうと推定された。現在の、牛塚と呼ばれている土壇が、中門の跡と思われる。

当寺院は、白鳳時代から鎌倉・南北朝時代に至るまでの間存続していたことが発掘調査で裏付けられている。正法寺と同一時代の寺院として、南野丘陵に龍尾寺・忍ヶ岡丘陵の先端に讚良寺・寝屋川市高宮廃寺の四寺が一直線上に等間隔に建立されていた。『正法寺縁起』に「元弘・建武の兵火に遇て衆僧悉く退散しぬ。其の後堂閣僧防悉く鳥有となり、僅かに三重の塔のみ尚存す」とある。

平成5年の調査では、平安時代中期の基壇の横から、「正方寺」と墨書きされた土師器坏が出土している。今回の調査では羽口が出土し、寺に所属する鉢・鍛造が行なわれた可能性がたかく、寺を考える上で貴重な出土となった。その他、正法寺跡周辺の遺跡として、寺跡の南側に木間池北方遺跡があり、河川内から奈良時代の土馬が多数出土し、水辺祭祀が行なわれたと推定される。またその南側に広がる南野遺跡では、奈良時代の土師器坏Aに「大」の字が墨書きされたものも出土している。



第1図 正法寺跡周辺地形遺跡分布図 1:25000

- |               |            |               |            |
|---------------|------------|---------------|------------|
| 1. 正法寺跡       | 8. 坪井遺跡    | 15. 城道路       | 21. 中野遺跡   |
| 2. 砂遺跡        | 9. 忍ヶ丘駅前道路 | 16. 木間池北方道路   | 22. 墓ノ堂古墳  |
| 3. 蔽良郡矢里遺跡    | 10. 南山下道路  | 17. 四條畷小学校内道路 | 23. 南野木崎道路 |
| 4. 北口遺跡       | 11. 開山南道路  | 18. 南野道路      | 24. 雄田遺跡   |
| 5. 更良岡山古墳群    | 12. 清滝古墳群  | 19. 奈良田道路     | 25. 墓屋遺跡   |
| 6. 更良岡山遺跡・讚良寺 | 13. 国中神社道路 | 20. 奈良井道路     | 26. 近世墓地   |
| 7. 忍岡古墳       | 14. 大上古墳群  |               |            |

## 第2章 調査の成果

調査地点は四條畷市大字清滝384-1番地で平成8年まで水田地であった。今回の調査は府道敷まで盛土を行いその上に個人住宅建設の計画が行われた。建設工事による遺跡破壊はないが、予定地内に正法寺跡の基本層序と遺構を正確に把握するためのトレンチ調査を実施した。

### 第1節 基本層序

今回の調査区で調査を行った堆積土層は次のとおりである。水田の基本層序は第1層耕土。第2層床土。第4層の下層で溝を検出した。その堆積土層は第5層にぶい黄橙砂質土10Y R 7/4。第6層にぶい黄橙砂質土10Y R 7/2。第7層灰白色砂層10Y R 8/2。第8層灰白色砂質土10Y R 7/1。第9層灰白色細砂層10Y R 8/2。第10層にぶい黄橙砂質土10Y R 6/4。第11層にぶい黄橙砂層10Y R 7/4。第12層灰褐色砂層10Y R 6/2。第13層灰褐色砂層（小石混じり）10Y R 6/2であった。調査区の地山はにぶい黄褐色砂層である。

### 第2節 遺構

検出された遺構は奈良時代から平安時代にかけての溝及び柱穴である。溝は調査区のほぼ中央のX=-139,995地点で検出した。溝は東西方向に掘られたもので、調査区内で延長6.5mまで確認した。検出肩部は東寄りでT.P+32.30m・幅2.4m・深さ44cm、溝底はT.P+31.86mで断面は皿状を呈する。西寄りの肩部はT.P+32.15m・幅2.3m・深さ47cmで溝底T.P+31.68mを測る。すなわち溝底の比高差からみて、東から西に向かって流れた溝である。

この溝は大阪府教育委員会が主要地方道枚方・富田林・泉佐野線（打上バイパス）建設に伴う平成5年の調査により、93-5区のX=-139,992地点で検出している幅2.2~3mの溝に続く遺構である。今回調査した溝内から、正法寺創建時の素弁蓮華文軒丸瓦6点をはじめ丸瓦・平瓦片が一括で出土している。また土器類は後述する第3節出土遺物で詳しく述べるが、古墳時代と奈良時代から平安時代にかけての須恵器・土師器が出土している。

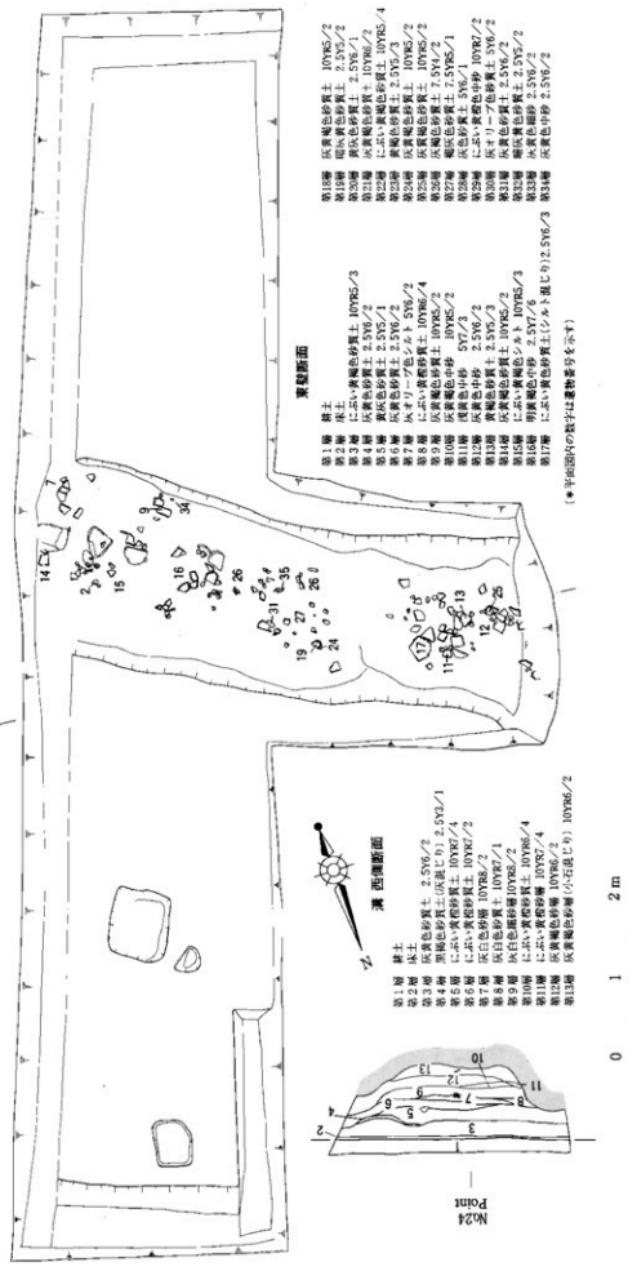
出土遺物は溝内中央部に集中しており、その大半が溝埋土中のもので東壁断面の最下層である第31層灰黄色砂質土2.5Y 6/2から軒丸瓦（第3図-2）、丸瓦（第4図-7・9）、平瓦（第5図-14）、須恵器鉢（第6図-26）が出土した。

これらの土器及び瓦の年代からみて、この溝は平安時代に消滅した可能性がある。また、溝の北側で検出した柱穴は1辺90cm×75cmの隅丸方形の掘り方をもち、深さは44cmである。柱穴は2ヶ所検出したが、そこからの出土遺物及び礎石などは検出されなかった。トレンチ調査のため、この柱穴が掘立柱建物のどの位置にあたるかは不明である。検出された面は、この溝と同じ面で、整地後この建物と溝が同一時期に存在したものと思われる。

No. 24 Point ライン



No. 24 Point ライン



第2図 正法寺跡 平面図及び土層断面図

### 第3節 出土遺物

今回の寺跡の調査で出土した遺物は、すべて溝から出土した。大半が瓦であるが、他には土師器・須恵器などの土器類、羽口などがある。

調査区で得られた遺物は、整理箱で10箱程度であった。その主な遺物について略述する。

#### 瓦類

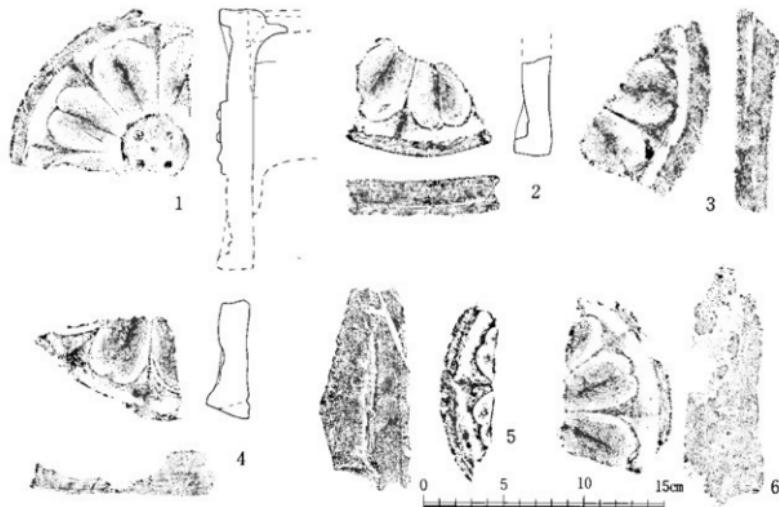
今回の調査でも瓦が主な出土遺物となっているが、そのほとんどが平瓦であった。軒丸瓦が少量含まれ、軒平瓦は皆無であった。叩き具は数種類使用され、斜格子・正格子・繩（図版6-44）・三角格子目（図版6-42~43）などが用いられている。

##### （1）軒丸瓦（第3図、図版5）

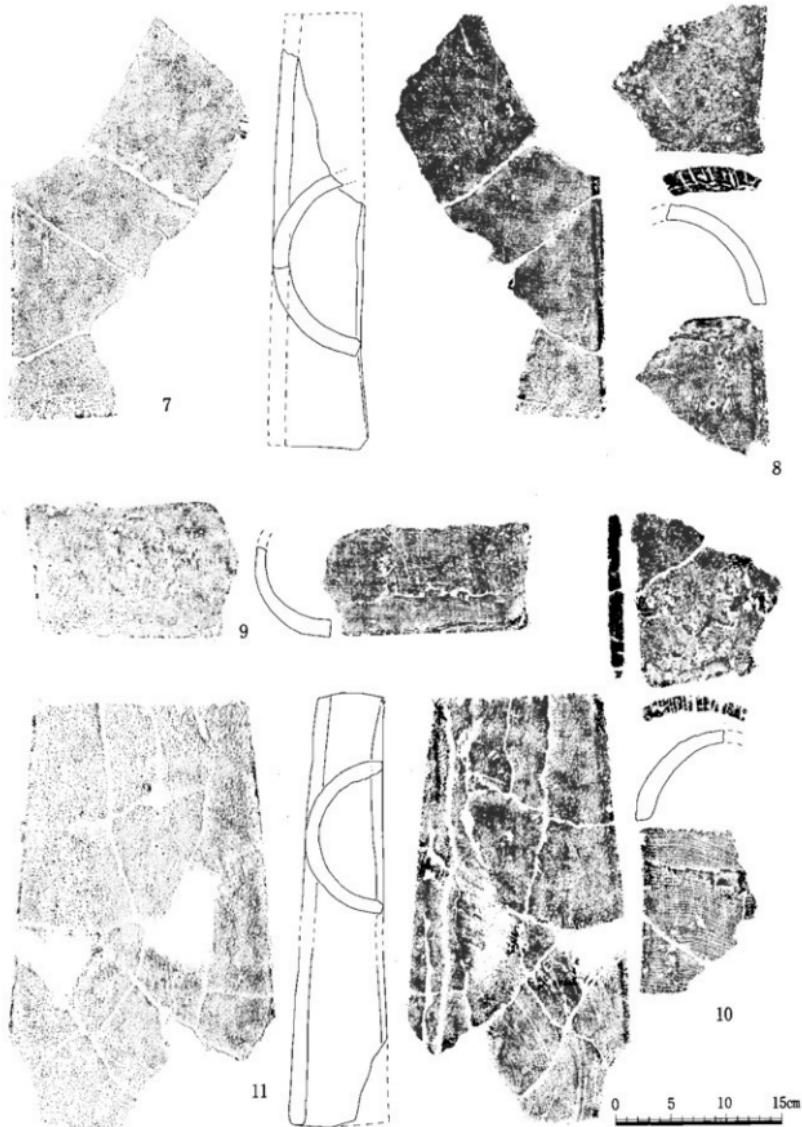
出土した軒丸瓦はすべて素弁蓮華文軒丸瓦であり、創建時のものである。

第3図-1（図版5-1）は瓦当部約 $1/4$ が残存している。中房はわずかに欠損しているが $1+4$ の蓮子を配している。瓦当厚は2.2cmを計る。瓦当部と丸瓦との接合部凹凸両面に補足粘土が加えられている。丸瓦の厚さは約1cmを計る。やや軟質で、灰色を呈している。

第3図-2（図版5-2）は瓦当部の下部にあたる。瓦当側面は、枷型痕を横方向に丁寧にナデ調整されている。焼成はやや軟質で、明茶褐色を呈している。



第3図 溝内出土軒丸瓦拓影・実測図



第4図 溝内出土丸瓦拓影・実測図

**第3図-3（図版5-3）**は瓦当右部である。瓦当側面はナデ調整されているものの、枷型の痕跡が明瞭に残されている。焼成はやや軟質で、灰色を呈している。

**第3図-4（図版5-4）**は瓦当左下部である。瓦当側面はナデ調整されいてるが、枷型の痕跡が残っている。焼成はやや軟質で、灰色を呈している。

**第3図-5（図版5-5）**は瓦当左部である。瓦当部と丸瓦との接合部凹凸両面に補足粘土が加えられているが、凸面にその痕跡が顕著である。丸瓦の厚さは1.3cmを計る。焼成は硬質で濃灰色を呈している。

**第3図-6（図版5-6）**は瓦当右部である。瓦当部と丸瓦との接合部凹凸両面に補足粘土が加えられ、凹面を強く横ナデ調整されている。凸部はナデ調整されている。焼成はやや軟質で灰色を呈している。

## （2）丸瓦（第4図、図版5）

出土した丸瓦はすべて行基葺式のものである。凸部に施された叩き痕を完全に消し去ったものと、痕跡を残したものがある。

**第4図-7（図版5-7）**凸面にはナデ調整が施されており、叩きの痕跡は残っていない。凹面は布目痕を残している。側端凹面に面取が施されている。焼成はやや軟質で、灰色を呈している。

**第4図-8** 軒丸瓦の瓦当部が脱落した丸瓦部である。瓦当部との接合のため丸瓦の端面にキザミが施されている。凸面にはナデ調整がされており叩きの痕跡は残っていない。凹面は布目痕を残しているが、補足粘土部分を横ナデ調整している。側端凹面に幅広の面取りが施されている。

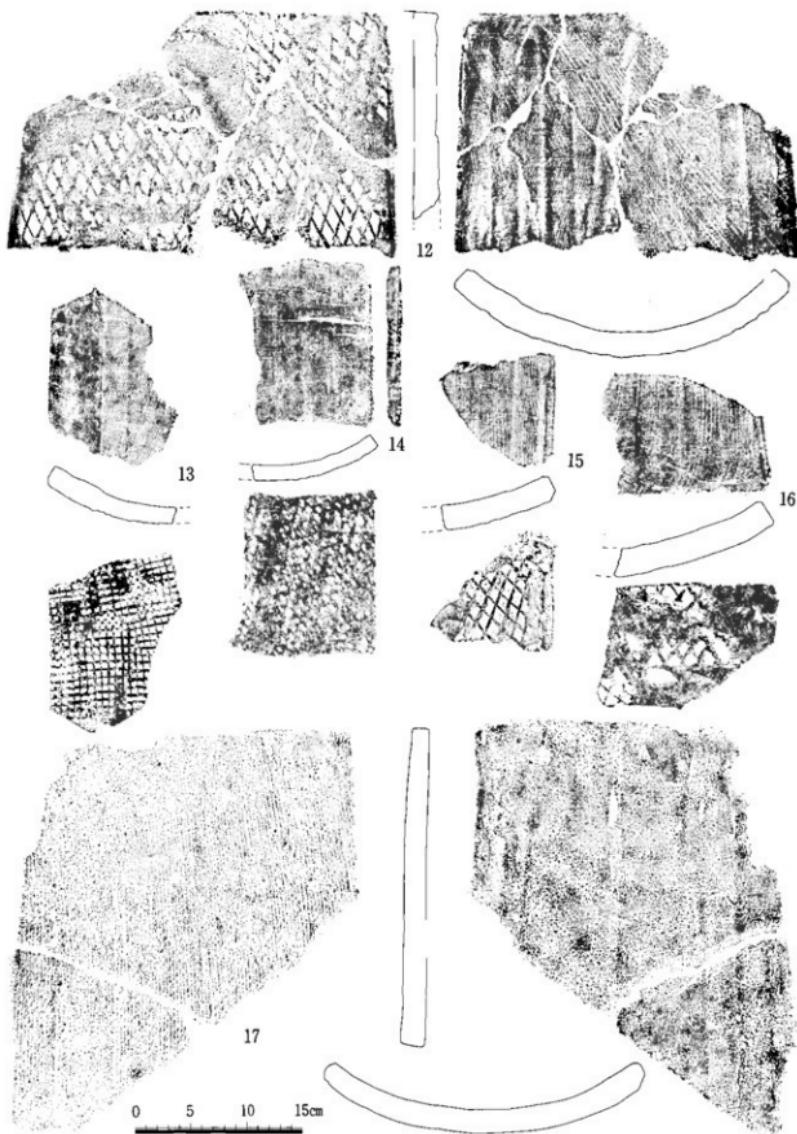
**第4図-9** 凸面にはナデ調整が施されているが叩きの痕跡がわずかに残っている、斜格子目である。凹面は布目痕を残している、粘土板の合わせ目が明瞭に認められる。焼成はやや軟質、肌色を呈している。

**第4図-10** 丸瓦の瓦当部が脱落した丸瓦部である。瓦当部との接合のため、丸瓦の端面及び側端面にキザミが施されている。凹凸面ともに接合部の補足粘土の剥離痕が明瞭に認められる。凸面にはナデ調整が施されており叩きの痕跡は残っていない。凹面布目痕を残している。焼成はやや軟質で、淡肌褐色を呈している。

**第4図-11（図版5-11）**一部欠損しているがほぼ原形を留めている。凸面にはナデ調整が施されており、叩きの痕跡は残っていない。凹面は粘土板の糸切り痕、布目痕が残っている。粘土板の合わせ目の跡が明瞭に認められる。側端凹面に面取りが施されている。全長約38.5cmである。焼成はやや軟質で、黒灰色を呈している。

## （3）平瓦（第5図、図版6）

平瓦は桶巻き造である。桶からの切り離し痕が見られ、そのほとんどが凹面から行なっている。凸面には正格子・斜格子・三角格子・縄目叩きが施されている。



第5図 溝内出土平瓦拓影・実測図

**第5図-12** 凸面は斜格子叩き痕を残して部分的に磨り消されている。凹面は枠板痕跡、布目痕を残している。粘土板の糸切り痕を明瞭に残している。側端凹凸面に面取りが施されている。

**第5図-13(図版6-13)** 凸面は正格子叩きが施され、磨り消されていない。凹面は枠板痕跡、布目痕を残す。側端凸面に面取りを施している。焼成は硬質で灰黒色を呈している。

**第5図-14(図版6-14)** 凸面は斜格子叩き目を施している。凹面は板枠痕跡、布目痕を残している。側端面に桶巻き円筒から切り離す際の分割面をそのまま残している。凹面からの切り離しである。

**第5図-15(図版6-15)** 凸面は斜格子叩き目を残して部分的に磨り消されている。凹面は枠板痕跡、布目痕を残す。側端は凹凸面とも面取りが施されている。

**第5図-16(図版6-16)** 凸面は斜格子叩き痕を残して部分的に磨り消されている。凹面は枠板痕跡、布目痕を残している。粘土板の糸切り痕を明瞭に残す。側端は凹凸面とも面取りが施されている。

#### (4) 隅切り瓦(第5図-17、図版7-17)

広端の左隅を切っている。凸面は側端面にやや平行な縄叩き痕を残している。凹面は板枠痕跡、布目痕を残している。側端は凹凸面ともに面取りが施されている。原型を留めており、全長約36cmである。

##### 土器類

土器類は古墳時代と奈良時代から平安時代にかけてのものであった。瓦と同様溝からの出土である。古墳時代のものには長脚二段透かしの有蓋高坏の坏部、円筒埴輪(図版6-45)の細片などが含まれ、清瀧古墳群の存在を感じさせる。奈良時代を特徴づけるものでは高台のついた須恵器坏Bと一段の放射暗文をもつ坏C、その他にも暗文をもつ坏の小片が数点認められる。

#### (1) 須恵器(第6図、図版6-7)

**第6図-18(図版7-18)** 坏B 坏Aに高台がついたものである。口縁端部は尖り気味におさめる。器高4.5cm、胎土は密である。

**第6図-19(図版7-19)** 坏B 坏Aに高台がついたものである。口縁端部が欠損しているが第6図-18と器形・胎土・色調が同様である。

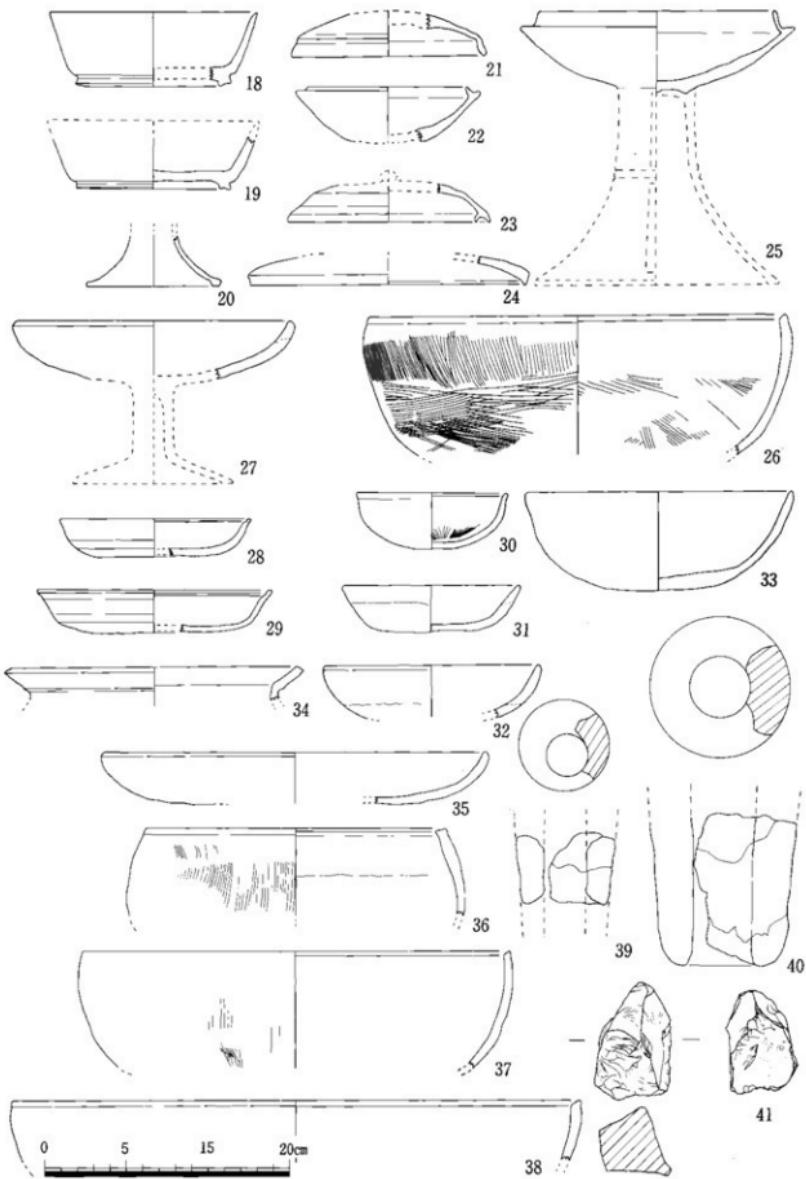
**第6図-20(図版6-20)** 高坏 脚裾部の一部のみ残存。

**第6図-21(図版6-21)** 坏蓋 小片である。

**第6図-22(図版6-22)** 坏身 小片である。たち上がりが矮小化し、低く内傾している。

**第6図-23(図版6-23)** 坏蓋 小片であるが、つまみがつくと思われる。内面にかえりをもつものである。

**第6図-24(図版6-24)** 坏B蓋 小片であるが、つまみがつくと思われる。内面にかえりをもたない。



第6図 溝内出土土器実測図

**第6図-25(図版7-25)** 有蓋高坏 浅い坏部をもつ。脚部は欠損しているが透かしの痕跡が二ヵ所に認められ、長脚二段透かしの脚部をもつと思われる。胎土は緻密で、焼成は硬質、砂粒は微細である。青灰色を呈している。

**第6図-26(図版7-26)** 鉢 屈曲しながら立ち上がる口縁部からなる、端部に内傾した面をもつ。内外面に1cmあたり4~5本のハケメを施し、口縁部をナデ調整している。胎土はやや密で砂粒を含む。淡灰色。

## (2) 土師器(第6図、図版6~7)

**第6図-27(図版6-27)** 高坏 坏部の一部のみ残存。口縁端部を丸くおさめている。

**第6図-28(図版7-28)** 坏A 口縁部上半がわずかに外反し、口縁端部は内側に巻き込み気味である。器高2.3cm、胎土は密である。橙色。

**第6図-29(図版7-29)** 坏A 口縁部上半がわずかに外反し、口縁部は内側に巻き込み気味である。器高2.7cm、胎土は密である。橙色。

**第6図-30(図版7-30)** 坏C 丸底の底部と屈曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁端部は内傾する面をもつ小型の杯である。内面口縁部中央から底部に向けて、一段の放射暗文を施す。口径9.4cm・器高3.4cm。胎土は密である。茶橙色。

**第6図-31(図版7-31)** 坏C ほぼ完形品である。平底気味の底部と外反する口縁部からなる。口縁端部は丸くおさめる。口径10.8cm・器高2.8cm。

**第6図-32(図版6-32)** 壺 口縁部片。口縁端部を丸くおさめる。口縁部外面に粘土紐接合痕が見られる。

**第6図-33(図版7-33)** 壺 ややまるみをおびた底部から内傾しながら立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさめる。砂粒多く含む。口径16.4cm・器高6.1cm。

**第6図-34(図版6-34)** 壺 [く]字状に外反する口縁部片。端部は外傾する面をもつ。

**第6図-35(図版6-35)** 皿 ゆるやかな丸みをもった口縁部、端部は丸くおさめる。

**第6図-36(図版6-36)** 鉢 口縁部片。内傾する口縁部、端部に内傾する面をもつ。外面にハケメを施し、内面は粘土紐接合痕が見られる。

**第6図-37(図版6-37)** 鉢 口縁部片。ゆるやかに内傾する口縁部、端部に内傾する面をもつ。外面にハケメがわずかに残る。

**第6図-38(図版6-38)** 鉢 口縁部片。内傾する口縁端部をもつ。胎土は密である。

**第6図-39(図版7-39)** 羽口 内面が平滑であり、棒などを芯にして制作している。残存長4.1cmの小片である。

**第6図-40(図版7-40)** 羽口 内面が平滑であり、棒などを芯にして制作している。口縁部に鉛滓が付着している。残存長9.2cm。

**第6図-41** サヌカイト石核。溝の地山直上から出土した。その他にも剥片が少量出土している。

### 第3章 まとめ

第1章 遺跡の位置と歴史的環境でも述べたように、正法寺は薬師寺式伽藍配置であると推定され、白鳳時代から鎌倉・南北朝時代に至るまでの間存続されていた。

最近の寺跡の調査では、寺域で「正方寺」と墨書きされた土器が出土した。南側に近接する遺跡からは、河川から数体の土馬とともに須恵器の壺や坏が出土し水辺でまつりが行なわれた。

そのもう少し南側にある南野遺跡では〔大〕の字などが書かれた墨書き土器数点が出土した。四條畷市における奈良時代の遺跡は数多いとはいえない状態であったが、最近になってこの時代の遺跡が増えてきた。これらは正法寺を中心とした遺跡といえるのではないだろうか。

正法寺跡の発掘調査は数回となく行なわれているが、今回の調査は面積も少ないこともあって主な遺構は溝（長さ6.5m・約幅2.4m）であった。その溝からの出土遺物は今までの調査と同じく瓦が主で、軒丸瓦は創建瓦といわれている素弁蓮華文軒丸瓦であった。正法寺は周知のように、古墳群であった地を整地して寺を建立した。その存在をうかがわせるように、古墳時代の須恵器や埴輪の小片が出土した。その他に奈良時代から平安時代の土器も出土したが、ふいご羽口はこの時代に属するものと思われる。羽口は2個体出土し、そのうちの1個体には羽口の先が残存し、鉱滓が付着している。これは正法寺における金属製品の生産の存在をうかがわせる貴重な出土となった。

発掘調査では伽藍配置などの主要堂塔解明に主眼がおかれるのは当然であるが、寺院に付属する造営関係工房や修理所などの金属関係工房が解明されることとは、寺の全体像を知るうえで重要である。古代寺院には工房を持つ例が多いが、寺院の付属工房では銅や青銅製の仏像や仏具の生産に当たり、鉄製品に関しては農具・工具などの生産をした。寺の造営時には、鉄釘の鍛造も行なったであろう。正法寺も専門工人を組織して、寺に必要な金属製品の生産に当たっていたと考えができる。

寺院に近接する東側の遺跡でふいご羽口・鉱滓・鉄釘などの製品が出土している、現在発掘調査中でまだ未整理であるが、まとまった量が出土すると思われる。この遺跡は正法寺に属する工房であった可能性が高い。鍛造については寺に所属する工房であっても、製品は寺院以外の需要があり、銅や青銅製品とは異なった生産のありかたを考える必要がある。正法寺の北西には同時代の讃良寺が存在していたが、その跡からも鉄滓・銅滓などの鉱滓がまとまって出土している。これらも寺院専属の金属関係の工房の存在をうかがわせるものである。

正法寺の北東隅で、平瓦が三枚重なって熔着したものが出土したが、これは寺域周辺に正法寺に所属する瓦窯や工房があったと考えられる。寺の造営に当たって金属関係工房、瓦工房、建築関係工房などの寺専属の工房が存在するのは当然のことと考えられるが、正法寺跡でもこのような施設が存在した可能性は高く、今回のふいご羽口の出土はその手がかりの一端になるであろう貴重な出土となった。

## 報告書抄録

フリガナ	ショウホウジアトハックツチョウサガイヨウホウコクショ
書名	正法寺跡発掘調査概要報告書
シリーズ名	四條畷市埋蔵文化財調査報告
編著名	野島 稔
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	Zip. 575 大阪府四條畷市中野本町1番1号 Phon. 0720-77-2121
発行日	1997(平成9年)3月31日

所収遺跡	所在地 市町村	コード 272299	北緯 34° 44' 14"	調査期間 平成8年12月12日 平成9年3月31日	調査面積 54m <sup>2</sup>	調査原因 個人住宅建設
ショウホウジアト 正法寺跡	四條畷市 清滝		東經 135° 38' 59"			

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
正法寺跡	寺	古墳時代 奈良時代 平安時代	溝	土器 瓦 羽口 サヌカイト	羽口の出土は、この遺跡で初見である。寺を考える上で重要である。

図 版

図版1 調査前全景・調査精査スナップ



(西から)



(南から)

圖版2 溝内土器出土状況



(西から)



(西から)

図版3 溝内出土遺物実測スナップ



(西から)



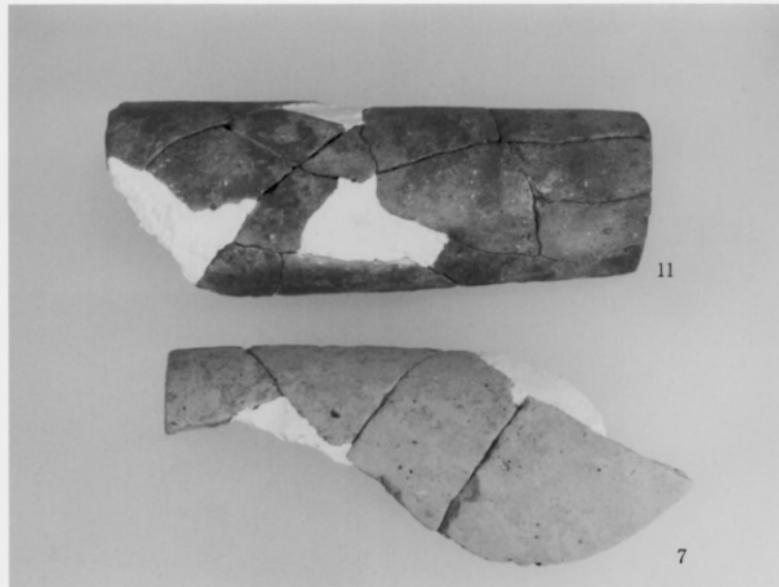
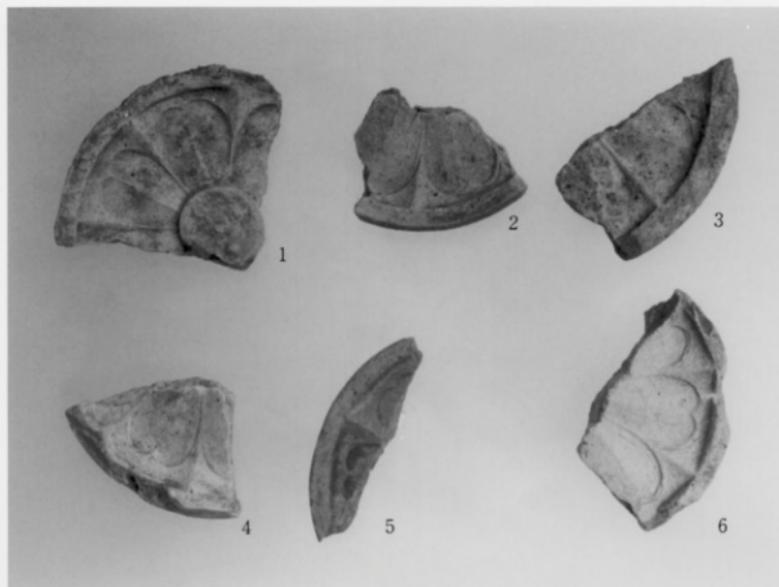
(西から)



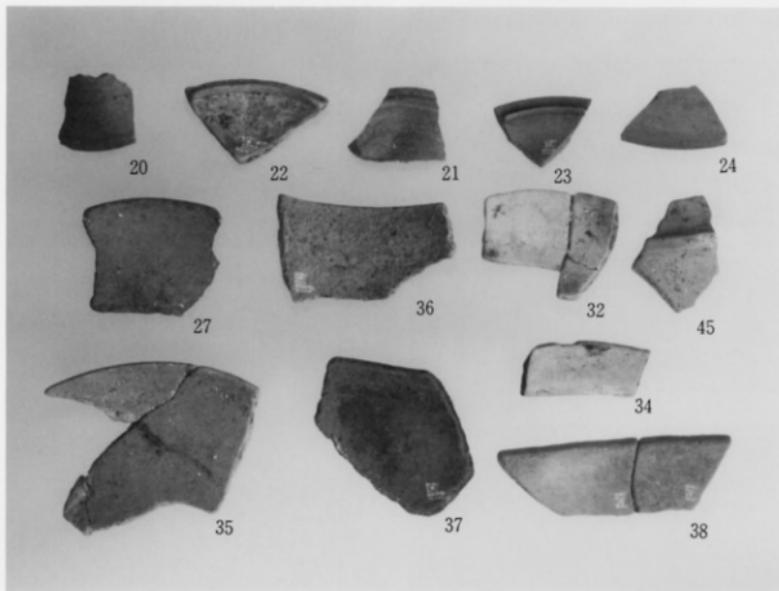
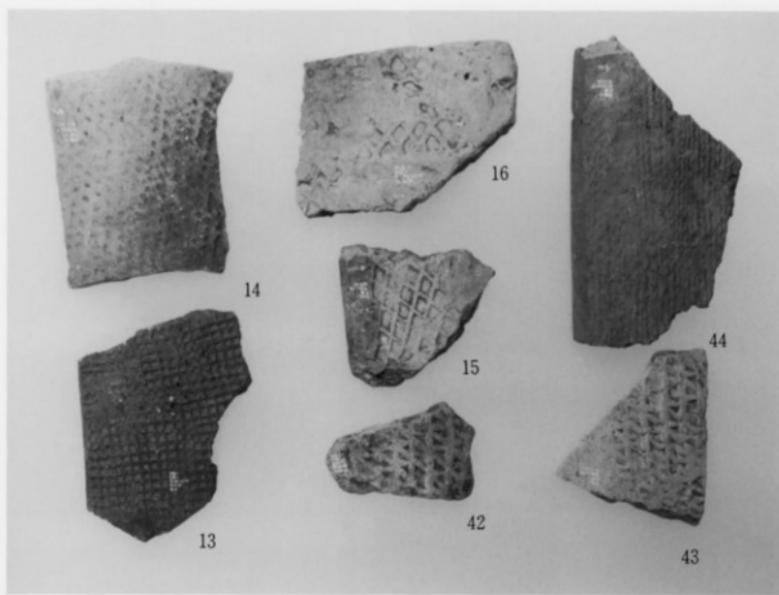
(南から)



(西から)



図版6 溝内出土瓦・土器



図版7 溝内出土瓦・土器



正法寺跡発掘調査概要

平成9年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会

四條畷市中野本町1-1

印刷 加地企画印刷株式会社